

時代の波

2019年12月に文部科学省が発表したGIGAスクール構想によれば、「1人1台の学習用端末(タブレットやパソコンなど)」と、クラウド活用(学習ツールなど)を前提とした「高速・大容量ネットワーク環境」について、当初2023年度までに学校に整備する計画でした。日本の教育におけるICT化の遅れは以前から指摘されてきましたが、様々な理由で先延ばしされてきた感がありました。皮肉なことにコロナ禍によりICT化が急速に進み、当初の計画が1年半前倒しにされ、2021年度の7月には96%の小中学校で利活用を開始したとのことでした。

環境が整い、方向が定まれば、子どもたちの学びの可能性はどんどん広がっていくと思います。かく言う私は以前高校に勤めていて、ICTについてはほとんど関わったことがなく、コロナ禍となった年の2020年度に初めてzoomというWeb会議システムを知りました。それどころか大学の授業では当たり前であったプレゼンテーションツールもあまり用いる機会はありませんでした。そんな不慣れな教員ですが、それでもこの3年間、授業や会議で当たり前のように使用することになり、急速なICT化の影響を感じています。

今年度、教育実習の様子を見る機会があり、公立中学校の2年生の授業を参観させていただきました。授業の後半では、グループ毎に考えた意見をタブレット端末に記入して「提出」し、教室のモニターに映されたグループ毎の意見を全員で共有する、ということが行われていました。実に自然な流れであり、タブレット端末がもはや特別なものではなく授業のツールとして使われていました。聞くと、その学年は、2020年度に市内の小中学校にタブレットが配布されたので、小学校5年生から活用が始まり4年目を迎えるとのことでした。

また、院生が研修でお世話になっていた小学校では、校外学習に行く際に、児童一人一人がタブレット端末を活用するという試みをされたそうです。「校外学

澤 由紀子(立命館大学教職研究科准教授)

習のしおり」を印刷して冊子にするのではなく、データとして端末に配布し、児童はタブレット端末のみで学習をしたそうです。

高等学校でも設置者負担があるところと保護者負担のところとありますが、多くの公立高校では現在2年生迄端末の利活用が始まっているようです。私立学校では早くから取り組んでいるところもあり、全国的に高等学校で利活用が一気に進むと、再来年度の2025年度に大学等に進学する人の多くは、タブレット端末を使った授業を経験してくることになります。

一方大学では、コロナ禍にいち早くオンラインのシステムが整備され、研修も行われて、その素早い対応に、さすが大学だと感じ入っていたのですが、最近は先に述べた、小中学校、高等学校でタブレット端末を活用した授業を経験した人たちを受け入れる準備が必要ではないか、と思うようになってきました。時代の波がひたひたと押し寄せている気がするのです。

先日も学生から「情報関係の授業がもっと必要だと思う」という意見を聞きました。それは、新しいソフトの使用法をもっと教えてほしい、という意味だったと思いますが、私には、大学の授業でももっとICTを活用する必要があるのではないか、と言われているように思いました。私のような年を重ねた者だけでなく、大学生でさえ、いえ、大学生だからこそ情報技術の向上に追いつくことの重要性を感じているのだと改めて思いました。

令和の日本型学校教育で示される「個別最適な学び」を実現するためにも、ICT化の推進は必須であり、しばらくは、どの学齢段階においても試行と工夫が求められるのではないのでしょうか。かく言う私は、時代の波に溺れてしまわないように、周囲の方々をたよりになんとか泳いでいきたいと思っています。